

3分間で糖尿病患者の血糖値改善を支援する薬剤師

ひと

おかだ ひろし
岡田 浩 さん(52)

郷里・福岡県の薬局で勤め始めた12年前、血糖値が下がらず不機嫌な背広姿の男性がいた。ほかに、"インスリン治療が必要と言われた"と涙する中年女性や、"買い物袋のミカンを指して「果物は大丈夫よね？」と真顔で聞いてくる年配の女性……。40歳の新人は古株と勘違いされ、糖尿病の患者から質問攻めにあった。

興味がわき、対応するうちに、仲良くなった人の血糖値が改善すると気づいた。そこで、ペットを含めた家族構成や住む地域を聞き出し、店頭で一緒に対策を考えたり、ビールと発泡酒を全種類買い込んで写真入りの資料を作ったり、コンビニが扱う低カロリーの菓子を薬局に置いてみたり。

「生活習慣を指導するのではなく、頑張れそうな一歩と一緒に探し、続けられるよう応援する」という取り組みだ。

若い頃は地元で教師を志したが採用試験に通らず、小中学校や補習塾で講師を続けた。同業の妻の影響で薬剤師になったが、「生徒の一人ひとり、顔を見れば声をかけた」経験が生きている。

店頭での3分以内のやりとりが血糖値を下げることを研究で実証。この手法を広めようと、6年前から同業者向けに研修会を開く。今年1月からはカナダの大学で、薬局の薬剤師が患者を支援する研究を深めている。「薬を調剤するだけが僕らの仕事じゃないはずです」

文・写真 高橋美佐子

